
異界由来のトリレイシャル

ぽえっとりい裸俗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界由来のトリレイシャル

【Nコード】

N4890BA

【作者名】

ぼえつとりい裸俗

【あらすじ】

気が付くと、幼児になっていた。主人公はなににもわからないまま、ファンタジーな異世界で別人として生きていくことを余儀なくされる。異世界転生ファンタジー。

不意に自分という存在に気がついた。
ふかふかしたベッドのことだった。

記憶にある愛用のフランスベッドはもう少し硬い感触だった。記憶と現実は一致しない。

それから匂いに気がついた。自室に比べ、なんとも心地よいが、それゆえに他人行儀な香り。

この時点で、若干の疑念が生じる。

天井を見つめる。記憶にあるとおり、それは白かった。しかし、自室の天井にはもう少し愛想があったような気がしてくる。汚れにも似た微妙な紋様が浮かんではいなかったか。

この天井はあまりにも白すぎる。まるで白磁のようだ。

明らかに、自室とは違う場所で目覚めている。

しかし、ほとんど危機感が湧かなかった。

意識は未だに薄ぼんやりとしている。同時に、どこかもわからないこの場所に、妙な愛着と安心感を漠然と感じていた。

となりでもぞもぞと何かが動き、布の擦れ合う音と振動が伝わってきた。

「ん……う……」

ぼんやりとしたまま、上体を起こすのさえも面倒で、顔だけ右にある音源へと向ける。

そこには眠っている少女がいた。

日本人ではない。西洋風の顔立ち。

少女はうすいピンク色のパジャマに身を包んでいた。

ただし、長い睫毛も、白い肌も、かわいらしい頬も、さして眼を引くものではない。少女の持つ紺色のきれいな長い髪の毛に比べれば、あいかかわらず、精神には張りがなく、思考の焦点はぼんやりとしている。

心のどこかで、別に驚くに値しないという想念が湧く。

同時に、なんとなくまずいという感覚も湧き上がってくる。

少女のまぶたが開く。現れた虹彩はやや赤みがかった鼈甲色。

「ヤティファト、シエルト」

彼女は明らかに日本語ではない発音で何かを言った。

音は自然と耳に入ってきた。脳はまるで日本語のようにその音を完璧に把握していたが、そこから何の意味も取り出せなかった。

やがて気付くこととなったのだが、人間の心は、宿った肉体、あるいは脳に大きく影響を受ける。

目が覚めた頃は大体二歳から三歳のころで、それ以前の記憶はない。これは、新生児は長期記憶を作る能力がないためだろう。

また、目が覚めたばかりのころは、快感と不快感には自分でも驚くほど大きな反応をしてしまったし、同時に思考がままならない不自由を感じた。つまるところ、俺は幼児にはありえない精神を持っていたにも関わらず、幼児同様に振る舞わざるを得なかった。

このことは、適応という観点から見れば最良の結果を生んだ。

ぼんやりとしている間に、現状に対する理解と生きていくために必要な技能が身についてしまったためである。

仮に肉体に引っぱられることなく、十全な理性を発揮してしまっていたら、どうなっていたかわかったものではない。幼子の体で、言葉も分からぬ異郷に放り出されるのである。不安やフラストレーションは計り知れないだろう。

五歳になるころには、俺の意識も以前ほどではないにしろ、精密な働きを示すようになった。

そのころには、言葉に不自由もなくなり、この世界の常識や自分の現在の身分もある程度把握するようになっていた。

この世界で生きていくうえで、最も重要な前提的事実が二つある。一つ、ここは日本ではない。そもそも地球ではない。

二つ、俺は記憶にある俺ではない。人種も身分も名前も違う。肉

体の影響で、多少内面的にも以前とは違う。

如何な奇禍、如何な奇跡か知らないが、俺は別世界で別人として生きねばならなかったのである。

「シエルト、どこ？ シエルト」

リアが僕を呼んでいる。僕はすぐに彼女の紺色の頭を発見する。

僕は少しばかり移動して彼女の真上に立った。そして、そこから彼女に声を落とす。

「なに？ リア」

その声から、リアは僕の居場所を知る。確認しようと、リアは顔を上に向ける。

それと同時に、俺は両足のふくらはぎとふとももであまり太くない枝を挟み、蝙蝠のように逆さまになった。

「キャツ！」

僕のちよつとした悪戯に彼女は驚き、しりもちをついた。

リアからしてみれば、上を向いたら僕の顔がすごい勢いで落ちてきたわけで、驚くのも無理はない。

リアと枝の位置関係が、実に見事だったので思わずやってしまったが、少しだけ反省した。

「もう、シエルト！ おりなさい！」

リアは七歳の女の子だ。幼馴染だが、僕より年が上なので、昔から姉のように振舞っている。まあ、僕からしてみると彼女はちよつとませた妹分といった感覚なのだが。

「リアが登ってきたら？ 気持ちいいよ」

「私は淑女よ！ 木から木へのサルみたいな生き方はごめんだわ！」

「まったくおんなはというのはどうしてこう、地に足の着いた生き方を望むのだろうね？」

「宙ぶらりんで夢見がちなおとこよりはよっぽどマシよ」

「世の中を見渡すにはこれくらいの高さが必要なんだよ」

そういつて、僕は再び木の枝の上に立った。足元にリアが見える。「木の上でどうやってお料理するの？ どうやって眠るの？ 世の中見えたって生きるのは楽にならないわよ」

リアが僕を見上げながらいう。僕はそれに言葉を返そうと口を開こうとする。

「ふたりとも、おままことはおしまいよ」

僕の喉が震える前に、その声が僕とリアが即興の「おままごと」の幕を引いた。

僕の母だった。

「リアちゃん、ティータイムだからシエルトを呼んできてといったのに」

仕方がない子ね、と苦笑しながら母がいった。

「ごめんなさい、お姉様」

リアは素直に謝る。一方僕は、枝を両手で掴んで足と地面の距離を最低にしてから手を放し、結局地に足をつけることとなった。

家庭生活というものが生み出す重力は、この世界の大地以上である。

「やれやれ、しっかりしてくれたまえよ、リアくん」

僕がそういうと、リアはいい返すかわりに、足を踏んできた。

「シエルトちゃんには紅茶のかわりに雨水、マフィンのかわりに桑の実ね。最近ますますお猿さんみたいになってるみたいだから」

母さんはそう冗談をいって、僕の頭についた葉っぱを優しく払った。

今日のように天気がよく、気温がちょうどいい日は、ティータイムのために屋外に出されたテーブルが利用される。

出されるお菓子は、リアの母が作る。

リアの母親のライラ・コーパは同居人で、使用人のような、家族のような僕にはいまいち判じがたい立場の女性である。元々彼女には夫がいたのだが、リアが赤子の頃先立たれてしまい、それ以来この屋敷に住んでいる。このことは、母にライラとリアについて聞い

たとき、母がところどころ表現を曖昧にしながら話してくれたことを元に推測したことだが、おおむね間違っていないと思う。しかし、「遠くへ行っちゃったの」という決まり文句が現実に使われることがあるとは思ってもみないことだった。

ライラと母は元々親友だったらしく、二人はとても仲がいい。そのためか、使用人というよりは家族のようである。いや、実際、母はそのつもりで接しているし、ライラのほうもそのように振舞っている。ただし、この家の家事の一切は基本的にライラがする。以前、母が何かしようとしたとき、ライラは母を必死で止めていた。もしかすると、母の家政能力がゼロなためライラがやっているだけで、実際には雇用関係など存在しないのかもしれない。しかし、そのように考えると、ライラの着ているいかにも女中然とした服装の由来が分からなくなってしまう。もしかすると、実用主義で選んだのかもしれないし、趣味という可能性もなくはないのだが。

僕の家、ユレン家はある程度富裕な商家らしく、僕ら家族は大きな庭のある屋敷に住んでいる。使用人はライラと謎の老執事の二人のみだ。執事のフォートス・グレオは見た目セバスチャンといった感じで、何でもこなす万能執事である。

屋敷の外観は、使用人二人では足りないようにも思えるぐらい立派だ。僕が五歳児で、物の大きさを過大評価しがちなことを除いても、かなり大きいと思う。この世界の一般的な住居がどれくらいなのかはわからないが、日本の手狭な家屋とは比べるのもばかばかしい。住んでいるのは僕ら親子三人にコーパ母子、それから執事だけで、衣食に関してはさして手間がかからないようだが、何しろ敷地が広いので、その管理が大変なようである。

屋敷内には使われていない部屋、物置になっている部屋が多くあるが、それらは定期的にライラが掃除しており、基本的にどの部屋もある程度清潔である。

屋敷の何倍も手がかかりそうな巨大庭園に関しては、フォートスが管理している。その仕事振りを見てみると、彼が執事服を着てい

るだけの庭師なのではないかという疑ってしまう。しかし、同様の手際で様々な仕事をこなすため、庭師というわけではないだろう。彼は他にも薬師や医師も兼ねているのだ。さらに、ライラが仕事をできないときは、コックも務める。しかし、これも彼の膨大な仕事量においては氷山の一角に過ぎないと思われる。僕には未だに彼の職務の全貌を掴むことができないでいる。

本当に謎の人物である。

屋外に置かれた丸いテーブルを囲むように座ると、各々のカップにライラが紅茶を注ぐ。僕、母、リアは三人とも、至れり尽くせりのゲスト扱いである。ライラ本人はあれこれと周囲の面倒を見ながらお茶を楽しむ。朝昼晩の三食においても、同様に僕ら三人の面倒を見ながら食事する。時々、ライラが母親で、他はみんな彼女の子どもなのではないかと思うことがある。そういえば、僕の母はリアに自分のことを「お姉様」と呼ばせている。もしかすると、本当に……いや、ライラがリアの行儀にだけはわりとうるさいことを考えると、やっぱり僕と母は彼女の子どもではないということだろう。

ちなみに、フォートスはお茶にも食事にも参加しない。僕は彼が物を口に出している姿を見たことがない。

お皿に一つずつ置かれたお菓子はマフィンである。いや、マフィンとは違う名称なのだが、見た目、味ともにマフィンそっくりである。現在は思考にさえこの世界の言葉であるタスク語を使っているが、やはり地球時代の知識とそっくりな物体や概念には日本語の方がしっくりくるといふ場合が多々ある。これもその一例である。

一方注がれるお茶は甘めのウーロン茶に蜂蜜の風味を足したような印象のハーブティーだ。後味はハツカ風。最近はこのお茶も結構おいしく感じるようになってきた。食文化は慣れである。

ティータイムが始まると、リアが僕の文句を言い始めた。

「シエルトつてば、いつも木にのぼってばかり。もつとおとなしい遊びをしないと、危ないじゃない」

ちなみに、彼女のいうおとなしい遊びとは「おままごと」である。

二人しかないのだから、基本的に僕が夫でリアが妻という二人っきりのおままごとなのだが、僕にはその面白さが理解しづかった。ドロ団子の食卓ぐらいなら再現するのを手伝ってもいいが、フォートスにリアの父親役を押し付け、二人の結婚を認めてもらえるように説得するというおままごとは流石に苦痛だった。フォートスの哀れむような視線が忘れられない。リアはこんなおままごとをどこで知ったのだろう。それとも、完全に想像で作り上げたのだろうか。恐るべき才能である。

「好きなんだからいいじゃないか。それに、木のぼりばかりってわけじゃない。本を読んだりもするよ」

「本って、あんな本、あそびじゃなくて勉強よ、勉強」

僕の選ぶ本は五歳児には不似合いなものばかりである。この世界では既に活版印刷技術が存在しており、子ども向けの絵本も数多く存在する。僕はそれらを卒業し、もう少し上の年代のための本を読んでいる。しかし、それらの本が面白いかといわれると、そうでもない。確かにこの読書は娯楽というよりは勉強である。僕は読書を、純粹にこの世界の言語と知識を学ぶためにしているのだ。大人向けの本や、あるいはもっと難解に見える本を読もうとすることもあるが、思考力とはもかく語学力的にそれらは僕には難しすぎる。数行で挫折することも多い。とりあえずの目標はそれらを読みこなすことである。それゆえ、地道に自分の語彙力に見合ったレベルの本を、なるべく多く、なるべく早く読むようにしている。

「シエルトは本当に賢い子よね。まだまだ体は小さいけれど、頭のよさなら学校に行けるぐらいじゃないかしら。わが子ながら天才ねえ」

この世界では就学年齢は十歳であり、試験を受けて受かったものだけが通える。ただ、学校とは別に教会の学習日というものが存在し、子どもはそこで勉強をすることができる。年齢はまちまちだし、習う内容も教師である牧師の裁量による。子どもは基本的に読み書きをそこで学ぶ。しかし、僕とリアはフォートスから勉強を教わっ

ていた。というのも、この近くには教会がないらしいからだ。

「シエルトの知性はともかくとして、木のぼりは確かに危険かもしれないですね」

「大丈夫よ。いざとなったらフォートスがなんとかしてくれるわ」

「……それもそうですね」

一瞬、何かを思い出し吟味するような素振りを見せ、ライラは同意した。

流石フォートス。すごい信頼感である。

お茶が終わると、不幸なことに僕はリアにつかまってしまった。

彼女の千篇一律に見えて気を抜くと稀にすごいイベントが起きるという、おそろしいおままごとにつき合わされているうちに日が暮れた。

僕は夕食を食べた後、読書をし、母と同じ寢床で寝た。慣れてはいるのだが、早く自分専用のベッドが欲しいと思う。

目が覚めると、隣に見知らぬ金髪のスレンダー美女がいたでござる……ということには、寝ぼけていてもならない。意識がない頃から母に面倒を見られていたせいで、すっかり彼女には慣れてしまっていた。意識の上では、母とは地球時代の母で、金髪の母には違和感がある。彼女の子どもでない自分を申し訳なく思う気持ちもあれば、子どもでないのに子ども振りをしなければならぬことに對する八つ当たりめいた恨みもある。母だけでなく、父に対しても似たような思いがある。しかし、一方で、僕の肉体が、無意識が彼女のことを母として受け入れているのは間違いない。だから、彼女の顔を見ることで、複雑な思いと同時に、至極単純な思いも生じる。愛着とか、安心感とかそういうものだ。

僕のほうが先に目覚めることは珍しい。子どもの眠りは深いからだ。

気がつくと、母は目を覚ましていて、僕と見つめ合う形となった。

「おはよう、母さん」

「おはよう、シェルト」

僕も母も「んー」とうなりながら伸びをする。あいにく今日は曇天らしく、カーテンを開けても窓から燦々とした陽光は射しこまない。僕の身の回りの世話は、ライラではなく母がすることになっている。ただ、僕の場合、何から何まで面倒を見ると身も世もなく恥ずかしくなってしまうので、早め早めに行動して母に世話を焼かれないようにしないといけない。母は僕を猫かわいがりしたいらしく、気をつけないと三歳児に逆戻りしたような錯覚を覚える事態になる。

僕は手早く部屋を出て、まず用を足して、それから顔を洗い、用意しておいた着替えに袖を通す。われながら手の掛からない子ども

振りである。それが母親の自慢でもあり、不満でもあるのだろう、母はそういう僕を微妙な笑顔でよく褒める。最近は僕にヤキモチを妬いて欲しいのか、僕とリアの言い争いではリアの肩を持つことが多くなってきた。

やがて朝食の時間になると、家族が食堂に集まる。とはいえ、少し前から父は家を空けているので、フルメンバーには一人たりない。朝食の緑色のパンを口に含むと、母がしかめ面になった。

「う、このパンなに？ 苦くてすっごい薬草くさい……」

「薬草園でとれたダツィラを練り込んだパンです」

ライラが説明をする。

「うわー健康によさそー」

「はい、ダツィラの効能は三つありまして……」

ライラがダツィラについての知識を披瀝する。淀みなく、その有用性を羅列する。

「フォートスの入れ知恵？ 嫌になるわね、もう」

ライラがフォートスに提供を頼むのか、フォートスがライラに推薦しているのかよくわからないが、食卓には健康に良い薬草を使った料理が出る。ライラの料理の腕は確かだし、薬草も基本的にそれほどわるくない味なのだが、稀に非常に不味いことがある。こういうとき、ライラはもちろん味見をしているのだが、味の出来など気にせず食卓に出す。フォートスが選んだ薬草だ、といえば、誰も文句をいえないことがわかつているからだ。

母は皿の端に端の欠けたパンを除けた。

「お母様、僕これ残していいですか？」

「だ・め・よ。カラダにいいんだから」

そういった手前、自分が食べないわけにはいかない。母は再びパンを掴み、口に含んだ。

母は単純かつ筋を通したがるので誘導が楽だ。リアだと駄々をこねるところである。七歳児と並べられる母というのも情けないが。

「そつえば、あと一つ効能がありました。美容にとってもいいそう

ですよ。シエルトが食べれば紅顔の美少年に磨きがかかりますね」
ライラはしれっと付け加えた。

「むー、私の美貌も褒めてよー。一児の母とはいえぴちぴちの十七歳よ」

僕は厚顔な母の顔を見つめた。実際の年齢、顔の造形、肌年齢はともかくとして、その表情は十七歳にしても幼い気がした。

「あら、シエルト、フィアネの顔に何かついていいるのですか？」

「んーべつにー。お母様、ダツィラパンたくさん食べてもつときれいになってくださいね」

「いわれなくても食べるわよ」

もそもそと緑色のパンを口に入れる。

「ごちそうさま、僕は書庫で本を読んでいますから、何かあったら呼んでくださいね」

僕は食べるのがわりと早い上、五歳児ということでも量も少なくし
てもらっているから、母よりも早く食べ終わる。

ちみちみと緑色と格闘する母の完食を待たず、食堂を出るため扉
へと向かう。

「んー……」

「フィアネ、お水をどうぞ」

「ぷはあ」

「リア、ちゃんと食べなさい」

「うっ……これ、苦い」

うしろから聞こえる音を察するに、母とリアがダツィラの森を抜
けるのはまだまだ先になりそうである。

食堂から書庫へは結構時間がかかる。書庫より自室の方が近いの
だが、自室においてある本は大部分読み終わってしまったので、こ
れから読む本を書庫で選び、自室へと運び込まなければならぬ。

僕は、書庫に入り、書架に目を滑らせる。何冊かピックアップし、
内容確かめる。

やがて本を選び終わる。持てるだけ持って、自室へと向かう。

自室に行く途中、朝食を終えたリアに出くわした。

「シエルトー、あそぼ？」

「えっと僕は、この本運んでる途中なんだけど……」

そういえば、今週は基本的に本を読んだり勉強したり、木にのぼったりばかりで、リアと一緒に遊ぶということが少なかった気がする。

ただ、リアのいう遊びは、僕にとって子守り同然で娯楽性に欠ける。

肉体的には五歳だし、五歳という身分にも慣れたものだし、ちょっと記憶にある昔の自分より幼児性が増しているとは思っけれど、やはり精神的にはリアより大分年上なのだ。それに、彼女が最も好むところの「おままごと」は尋常の五歳児でもその楽しさを理解するのに難しいところがあるだろう。

「うん、それ手伝ったげるから、そのあとあそぼうよ」

「わかった」

本を運び終わると、リアは僕を半分物置になっている空き部屋の一つに連れて行った。

「これであそぼ」

そういつて指差したのはマス目のある板である。「あそび」で「マス目」とくれば、ある程度想像はつく。

この屋敷の空き部屋には、いろいろなものが置いてあり、中にはゲームや玩具の類もある。半分物置になっている空き部屋は多少雑然としているだけで、物の雪崩の起きそうな気配もなく、埃も目立たない。実にこどもの遊び場向きである。

しかし、結構大きな板だ。マス目の数も囲碁ほどじゃないが多い。「こつち」の箱にコマと説明書があるの」

といって、リアは箱を渡してくれた。

説明書を読んでもみると、どうやらこれはリバーシに似たゲームらしい。リバーシと違い、最初からコマが置いてあるというルールはなく、かわりにボード上に多数のマークが存在し、盤上がコマで埋

め尽くされた時点で自分のコマがどのマークの上に存在するかが勝敗を決するらしい。また、マークの中にはゲーム中に効果を及ぼすものもあるようだ。

「これをここで……だから」

小さく呟きながら、リアは白地に裏表で違うデザインのマークが描いてある木製のコマを置いていく。

こういうゲームの資質があるのか、リアはなかなか達者である。相手をしていると意外と全体を見渡してプレイしていることがわかる。

そうはいつても、僕の方がこういったゲームの経験は豊富なので勝ててはいる。それでも、ヒヤツとさせられるゲームがなかったわけではない。

僕の腕が錆びているということもあるだろうし、五歳児脳には少々盤面が大きすぎるという面もあるかもしれない。

ただ、もちろん一番の理由は別にあつて、僕がゲーム中思考が明後日のほうに逸れてしまうことがままあったためである。

具体的にいえば、ゲーム中この家の外側に到達するプランを考えていた。

元々、木をのぼっていたのは、一種の気まぐれだったのだが、何度か試しているうちに、枝から枝へ移ることを覚え、いつしかそれが、屋敷を囲む塀から外へ出る、門以外の唯一の道であることに気付いた。

僕はこれまで外を見たことがない。特に気になつてもいなかった。親に外へ連れて行くよう頼んだこともない。しかし、重たくて開かない門とは別に、ちょっとした工夫で到達できるゴールがあるとなると、「外を見る」という行為にゲーム性が生まれてしまう。そうになると、外側が気にならずとも、外側が俯瞰できる位置を目指したくなる。この心の動きは自然なことだ。

マス目にコマを置きながら、盤上のゲームの次の一手ではなく、樹上のゲームの次の一手を考える。塀のてっぺん近くに枝を伸ばし

ている木は西の果てにあるが、そこまで行く道筋が問題なのだ。そもそもなぜ最初から西側の木の群れにのぼらないかというところ……

「あつ」

間の抜けた声が出る。僕の口から。

「ふふん。ぼつーとしてるからよ」

リアが勝ち誇る。彼女のコマは四隅の一角を占領している。四隅にあるコマはひっくり返すことができない。そして、四隅には高い得点がついているのだ。四隅が重要という点では、このゲームもリバーシと同様である。

「まいったな。四隅だけはゼツタイとらせないつもりだったのに」

「今回は私の勝ちね」

「まさか、ここから僕の逆転が始まるんだよ」

僕は次第に盤上に集中せざるを得なくなっていた。

リアの成長速度はなかなかのものだった。

翌日、僕は太い枝の上に降り立った。そこから堀に至るルートを考えてみる。

庭には様々な種類の樹木がある。

その中で屋敷の西側にある堀と接する樹木の太い幹はすべすべしていて、高いところにしか枝がない。この種類の木はクラムの木と呼ばれる。

以前、空き部屋で木のぼりに利用できそうな頑丈なロープを見つけたのだが、投げ縄として使えるような重量ではなかった。他にも色々考えたが、どうにも腕力が足りない。

そのため、堀と隣接する木の枝に至るには、ほかの木にのぼって飛び移るしか方法がない。

しかし、屋敷の西側の樹木は、半数近くがクラムの木である。堀に接する木に飛び移るための木に飛び移るための木に飛び移るための木に飛び移るための……とゴールから逆算したルートをいくつか作

つても、それらのクラムの木と僕がのぼれる種類の木が接しているポイントは一ツしか存在しないのである。

その唯一のポイントには、枝と枝の間にジャンプしなければ届かない距離が横たわっている。しかし、クラムの木が非常に頑丈そうな枝を伸ばしている一方で、もう片方の枝は慎重に移動しなければ折れてしまうほど細いのだ。そのため、この枝の上ではジャンプすることができず、したがってこのポイントを用いたルートは実質利用不可能である。

そこで、僕はいくつか新しいルートを考えた。

しかし、わりとどれもいい加減で、実現可能性の低いものばかりだ。

その内の一つが、バネの木を利用するルートだ。

背の低いバネの木からは、クラムの木には飛び移れない。が、バネの木は枝が非常によろしくしなやかなで、ジャンプ台のように使うことができる。僕が全力でジャンプして体重をかけても、反動で飛び上がれる高度がクラムの木の枝に達することはない。しかし、バネの木の枝の上方に細い枝をのばしている木から、慎重にバネの木の枝に落ちることができれば、必要な反動を手に入れることができるかもしれない。

他のどのルートでもそうなのだが、このアイデアも問題が多い。思いついたと同時に批判が頭に上ってくる、そういう種類のアイデアである。細い枝から飛び降りて、バネの木の枝にしっかり着地できるのか、枝は僕の着地に耐えられるのか、そもそも、必要な高度を得られるのか、などなど。

しかし、ギャンブル中毒ではないが、賭け好きの僕である。できるかどうか、試したい気持ちは結構大きい。

天然のジャンプ台を使うために、僕は枝から枝へと飛び移る。

結構な距離を移動したが、この程度は慣れたもので、危なげなところは少ない。平衡感覚も、空間把握能力も、木のぼりを通して、地球時代よりもはるかに増している。体力も跳躍力も日々増し続けて

いる。子どもの肉体の成長というものを僕の精神は木のぼりを通して感じる。

やがて、件の細い枝に至る。類似の細枝でこの場面のシミュレーションは済ましてある。足の感覚が、練習と同程度の強度であることを教えてくれる。一番はしつこならジャンプでクラムの木に届きそうだが、思ったとおり強度が足りない。今立っている部分でも、枝の悲鳴が聞こえそうな不安定さを感じる。これ以上すすむのは無理だろう。僕は念のために半歩下がる。

僕はバネの木の枝を見る。あの細い枝をジャンプ台とするのだ。上の枝と下の枝と地上。下の枝から地上に落ちてもたいしたことはいないだろう。子どもの強度なら、足の一本くらいは折れるかもしれないが。しかし、上の枝、今立っている所から落ちたら？想像した。しかし、恐怖はなかった。

木のぼりで高さに慣れたということだろうか。庭にある木は総じて背が高い。

それとも、フォートスが何とかしてくれる、とでも思っているのだろうか、僕は。

僕は冷静に、ジャンプに使用する力とジャンプする方向の微調整を、頭の中で行う。目は自分の足と着地点をいつたりきたりする。

一瞬想像と現実の境がなくなる。確信が僕を突き動かした。

僕の体は既に空中にある。

枝が近づく。足がしっかりとそれを踏みしめる。枝がしなる。

僕は再び空中へと放り込まれる。反動と体のバネを十全に利用できただろうか。わからない。

僕とクラムの枝の距離が縮む……しかし、どうにも高度が足りなかった。

「あッ」

僕の手が届く。精一杯伸ばした手のひらは枝に触れる。しかし、そもそも、手が届いても意味がない。僕の手ひらは触れた枝を握るには小さすぎる。最低でも、腕を枝に引っ掛けられなければ、ど

うにもならない。

敗因は高度の不足だった。けれど、もしかすると僕の体の小ささだったかもしれない。もう少し体が大きければ成功だったと思う。慣れたと思っていたけれど、それは表層意識の自己満足で、本当は精神と肉体がちぐはぐだったのかもしれない。プランを立てる上で、僕はもっと肉体のサイズを重視すべきだったのだ。

僕は落ちていく。

さて、この高さから落ちると、五歳児の体はどうなるのだろう。

答えはすぐにわかる。

僕は目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4890ba/>

異界由来のトリレイシャル

2012年1月14日17時01分発行